

第17号 華山会報

平成18年10月11日
財団法人華山会

渡邊華山、福田半香、山本栞谷

常葉学園大学教授・豊橋市美術館長 金原宏行



華山が大変な読書家であったことは、次の逸話（原漢文）が物語っている。
弟子の一人である山本栞谷（文化八年、明治六年）が華山を尋ねると、華山は残燈の下で書を読んでいた。華山が栞谷を振り返っていった。「あなたは何で深夜に訪ねてきたのか」と。そこで栞谷は「夜は既に明けました」といったら、華山は怒を聞いて、初めてこのことを知って、大いに笑った。華山の平生の勉強振りを知るべきで、聞くところによると華山は団飯豆油炙（握り飯に醬油を付けて焼いた）、すなわち焼き握りが好きであった。思うに、夜、読書をした疲れを慰めるためであったのだろうか。（西田春耕『口嗜小史』、続日本随筆大成9）

このエピソードは、ある日、弟子栞谷が訪ねると、華山は読書に没頭して、すでに夜が明けてしまっていた。弟子に知らされて、初めて知って呵呵一笑した。また、この好物が焼握りであったとは、いかにも質素な生活振りがつかえ、ここで華山は「払暁山人」とあだなされて登場しているが、払暁まで勉学に励んだということである。

山本栞谷は、石州津和野藩龜井侯の家臣吉田芳右衛門の子で、山本氏の養子となり、津和野藩家老で画家の多胡逸斎の門人で、家老の出府に従い、華山門に入った。華山の救済にも力を尽くし、人物画が得意であったが、六十三歳で没した。彼の最初の妻は半香の妹であった。また多胡逸斎は、華山と早くから親交があり、蛮社の獄に際して、私財数百金を投じて救出に力を尽くした。

華山没後の天保十三年十月十五日（一周忌が過ぎて）付け椿山の半香宛書簡によると、この年三十二歳の山本栞谷について「栞谷について（半香に）いろいろ配慮いただき、お礼申し上げます。津和野藩も近頃改革があり、栞谷は、相変わらず私方（椿方）に同居している（本来なら藩邸内に住むべきであるが、外住が両三年許されて「椿山と同居まかりあり候」とある。）しかし、こつしていてもさしたる益がないと気の毒に思われるので、貴方（半香）より序での折りに（栞谷に）お呼び申し上げてください。私方に同居するような人なので、良き友に就けば、何ほどの大物に相進むべき（なるべき）人物であるので、御遠慮なく説教してやってください」と書いている。栞谷の将来を大いに見込み、半香にその大成を依頼している。

椿山の住所は、小石川牛込天神下であり、嘉永年中になつて麹町三軒屋に住することになる。当時独身の栞谷の画業に半香が注目し、彼の妻の妹を嫁に世話したのである。

こついて、「先だつてお借りした花卉（図）草稿は、お返しします。少しばかり失礼を顧みず、「一笑までに手を加えました。」とある。山水を得意とした半香は、花卉、花鳥図の依頼があると椿山に回し、断つたというが、そんなこともうかがえる。以上華山と没後の弟子たち半香、椿山、栞谷の動向について記してみた。



48歳の福田半香



田原城跡 二ノ丸櫓と桜門

校長室から

愛知県立成章高等学校長
壁谷 宜男

毎朝、三河田原の駅から学校まで徒歩で生徒とともに通勤し、その間、行き交う町の人たちから生徒だけではなく私までも気軽に朝の挨拶をいただいている。神明社の鳥居を右に折れると本校の校舎が見え、や

がて校門前の軽い傾斜の付いたアプローチの中程までくると山本右太郎の銅像が全校の生徒や職員を迎えてくれる。校長室に入ると、毎朝、凜として背筋が伸びる。私も長い間、教員をしてきて多くの校長室に入ったが、このような感じを受けるのは本校の校長室だけである。掃き清められた神社の境内に立ったときの感じであるうか。正面に十二代藩主三毛康保の世子康寧による黒々と書かれた扁額「成章館」、その右横に椿山の描いた「渡辺華山先生四十五歳の像」を楠木華国が模写したといつ肖像画、さらに華山が警告した和蘭風説書の一説「田原八武ヲ構シ、徳ヲ敷キ、天地の間ニ独立致シ、掌大の地ヲ百世ニ存シ候様御工夫第一也、何デモ徳ニ無之テ八危シ」の額が掲げられている。正面左手には本校の大

先輩であり衆議院議員で大臣まで務められた上村千一郎氏の「真実一路」と氏が昭和天皇より勲一等旭日大綬章を親授している写真額、それらに対するように校長の机の背側には日下部鳴鶴の書「斐然成章」が掲げられている。私自身実際にまだ見たことはないが、華山から成章館掛に届けられた書簡が大切に保管されているという。どうもこれらの存在がこの校長室を重厚で緊張感のあるものにしていているようだ。

江戸時代、幕藩体制の諸藩は人材育成のため藩士の子弟を教育する藩校をもっており、愛知県内では尾張藩の明倫館、吉田藩の時習館があった。田原藩は表高一万二千石の小藩で、しかも領内の大部分は洪積大地で作物は取れず、種々の対策を講じてきたが、何ともならず根本的な藩政改革の必要に迫られ、藩医の菅生玄順はこの危機の打開には人材育成が緊急課題と考え、藩主三宅康和に献策し、藩校を開設した。ここから華山を中心に藩校「成章館」が管理・運営され、幾多の俊才を輩出したことは多くの人の知るところである。

一八七一年廃藩置県により成章館も閉じられることになったが、田原では向学心に燃える若者達を受け入れる教育機関を準備し、「田原義校」や町の有力者達の経費負

担により塾を設立したり、「如水社」を組織し学校、塾と連結し、人材の養成をはかった。その後も、巴江神社の社務所内に巴江義塾を興し「英・漢・数」を教授するなど若者の教育に熱心に取り組んだ。

旧田原小学校高等補習科の設立以来、さらなる上位の教育の必要性を痛感し、一九〇一年当時の町長山本右太郎を中心として各種学校としての成章館（修業二年）を田原小学校に付設し、ここから本校としてのスタートがきられた。一九一六年には山本町長の並々ならぬ努力の結果、待望の田原町立中学成章館として認可された。彼は羽織袴で文部省に出かけ、当時の文部大臣に幾度となく交渉しついに許可を得、建設資金も乏しい状況下で、町の有力者から寄付を集めたりするなど、設立に心血を注いだ。こうして当時、日本で唯一の町立中学ができたのである。山本右太郎像や町の人達が我々を毎朝、温かく迎え、見守っていてくれる訳が良く理解できた。成章高校は今でも田原の学校である。この寄せられる強い思いと期待をしっかりと受け止め、甘えることなくそれに答えるべく努力することが、校長として与えられた重大な責務である。

	目次
	題字「華山会報」華山会理事 小澤耕一
P	渡邊華山 福田半香 山本葉谷 金原宏行
P	愛知県立成章高等学校長 壁谷宜男
P	目次
P	画家渡辺華山の心象 『漢高祖酈食其見図』
P	『外国事情書』
P	田原市博物館所蔵品から 『文洪筆言偃像』
P	渡辺華山の 『自律狂歌草稿』鑑賞⑨
P	華山の田原行（一） 華山史跡
P	財団法人華山会 田原市博物館 からご案内

画家渡辺華山の心象

漢高祖酈食其見図
かんのこうそれいきをまみゆるす

天保二年（一八三一）絹本着色
縦一一・三・四cm 横四一・九cm
田原市博物館蔵

落款に「天保貳季四月作於全樂堂
華山登」とあり、天保二年四月に
「全樂堂」こと江戸麹町の田原藩上
屋敷敷地内にある華山の居宅兼画室
で完成したことがわか
る。

この作品と考えられる
記録が天保二年の華山の
日記である『全樂堂日記』
（愛知県指定文化財・個
人蔵）に記録されている。
『全樂堂日記』は、文政
十三年（一八三〇）、十二
月に天保に改元）の四月
十三日から天保四年三月



六日にいたる四年間にわたる日記
（他の『客坐録』『客坐掌記』『游相
日記』『毛武游記』と呼ばれる手控
画冊・紀行日記も同時に記述してい
るため、断片的な日記として使用さ
れる）である。

天保二年三月二十九日の項に「写
沛公見酈生図成」とあり、続いて四月
七日の項に「沛公見酈生図成」と
記されている。高祖とは、前漢の初
代皇帝である劉邦（在位前二〇二丁
前一九五）（前二四七〜前一九五）
のことである。また、酈食其（？
〜二〇三）は秦末・漢初の論客で、

劉邦に仕え、斉の国を説得して七十
余城を手に入れた。この図は臣下に
入る前の酈食其が劉邦を訪ねてき
た場面を描いている。女官に足を洗
わせながら、謁見したために酈食
其にたしなめられた故事を描いたも
のである。中国画の原本の存在も感
じさせる作品であるが、華山が人物
表現をする際に多用する素早いシヤ
ーブな線に迫力が感じられ、場面の
緊張感を見る者に感じさせる。これ
らの中国の故事を描いた際の落款は
隷書体が多く用いられるが、この作
品もその例に漏れない。

文政十二年八月に三宅家の家譜撰
集を命じられ、天保元年からは三ヶ
尻（現熊谷市）、同二年に厚木・桐
生・足利を旅し、紀行日記を残し、
天保三年五月には年寄役に進み、藩
の海防掛となる。また、小関三英・
高野長英と知り合ったのも天保二年
から三年にかけてと言われる。天保
十年五月の蘭学者弾圧事件「蛭社の
獄」直前の天保八・九年と田原塾居
中の天保十一・十二年に比較して、
この作品が描かれる天保年間前半の
代表作が少ないと言われるが、中国
画法の完成度の指標となる作品と考
えられ、この作品はこ
の時期の基準作と言え
よう。

この作品は、『田原
市博物館蔵名品選第
一集』にも掲載されて
います。

田原市博物館学芸員
鈴木利昌

『外国事情書』①

研究会長 渡辺 巨祥

昨年度、研究会は初稿『西洋事情書』（内閣文庫蔵『海防統彙議』所収本 内題「答人問書」）、

江川文庫所蔵の自筆再稿『西洋事情書』ならびに自筆『外国事情書』を取り上げ、岩波書店刊行・日本思想大系五十五・佐藤昌介校注の『渡辺華山』にもとづいて研究しました。江川家に秘蔵されている自筆『外国事情書』は、昭和四十三年（一九六八）「華山の生涯と絵画展」（田原町博物館）出展時の写真を利用しました。そこで今回から、その集大成として『外国事情書』を連載します。

天保八年（一八三七）六月、モリソン号江戸湾侵入事件をきっかけに、江戸幕府は江戸湾防備の強化をはかる目的から備場巡見を実施することになり、天保九年（一八三八）十二月、老中水野忠邦は、目付鳥居耀蔵を正使とし、江川英竜を抜擢して副使として相州備場見分を命じた。江川英竜は巡見終了後、復命書とともに、西洋事情を説いた建議書の上呈を企画し、その案文を華山に要請した。

華山はこれに応じて、天保十年（一八三九）三月、諸国建地草図一冊、『西洋事情書』二冊、ほか一冊、合計四冊からなる稿本類を江川英竜に送った。『西洋事情書』は、ヨーロッパならびに世界の現状を述べたものであるが、これは初稿ではない。初稿は、華山がのちに獄中から江川英竜に寄せた密書の中で、

『私宅より出で候書物は、三月中、半紙に認め上げ候事情某と申す書の初稿にて、あまりに過激につき、恐れ入り、差し上げ候ものにござ候』と述べている通り、内容が「あまりに過激」にわたったため、江川英竜に送るを見合わせたものである。（なお、これが後に蛮社の獄で没収され、有罪の根拠とされたものである）

初稿、再稿の『西洋事情書』については、再稿が初稿の「あまりに過激」な箇所を修正したものであるといっても、両者は本質的に異なるものではなく、江川英竜は、華山から送られた『西洋事情書』（再稿）には、すくなくならず不満を覚えたもののようである。それは、これには初稿と同様幕政の対外政策をかなり激しい調子で批判し、あるいは揶揄した部分が少なからず含まれていたからである。そこで江川英竜は、腹心の斎藤弥九郎を華山のもとにつかわし、あらためて起稿を依頼した。この時華山が執筆したのが、江川文庫所蔵

の華山自筆『外国事情書』であったと推定される。

『外国事情書』は、結果的には佐藤昌介氏が指摘しているように、蛮社の獄で華山が逮捕されたため、江川英竜はそのまま上申することを断念せざるをえなかったが、華山自身は、在野の知識人としてその意見を幕政に反映させる絶好の機会として考えていたようである。いずれにしても、

『外国事情書』は『西洋事情書』（再稿）に比べて知識内容がはるかに豊富であり、外国事情の客観的叙述に重点がおかれている。また、この書にもられた世界知識のそれぞれに出典が明記されており、華山がいかに知識の客観性を重んじたかがわかる。【例えば、漢籍として、耶蘇会士艾儒略の『職方外紀』と清の賀長齡編『皇朝経世文編』等、著者・訳書としては、大槻玄沢編著『環海異聞』、青地林宗訳『奉使日本紀行』、吉雄耕作訳『ヲロシア人北京紀行』や『和蘭風説書』等がある。】なかには、在来の文献のほかに、新資料としての蘭書が含まれており、【蘭書としては、『略史』（一八二四年の略史等・オンデルマンズの『歴史年代記便覧』である）や『ブーランスズン』（ルイ・ランズブゾンで、一般地名辞典）、『ニューエホイス』（技術・学芸一般辞典）等である】、当時としては、きわめて水準の高いものであって、華山の世界知識の集大成でもあると考えられる。

自筆『外国事情書』が江川文庫に秘蔵されている理由は、佐藤昌介著『渡辺華山』（日本歴史学会編集）によると、次のように推測されている。

江川の計画が、華山の逮捕によって挫折し、『外国事情書』が上申されずに終わったことが知られる。しかも、同書は、

『私愚存にては、御返し遊ばされ候儀は、然るべからずと存じ奉り候』

という斎藤の意見にしたがって、華山のもとには返却されなかつた。江川としては、自己防衛上、止むを得ざる措置であつたといえよう。では江川の計画が挫折し、『外国事情書』の上申が中止のやむなきに至つたのは、華山の逮捕にともなう偶然の結果にすぎなかつたのであろうか。そうではなく、『外国事情書』の執筆者が華山であることを探知した鳥居耀蔵が、江川を暗に脅迫したからである。鳥居からみれば、華山が江川の巡見復命書の執筆にあつて、『諸国建地草図』を送つて助言し、あるいは江川が幕府に上申するはずの外国事情に関する文書の代筆をしたことは、まさに幕政介入に等しい行為にほかならなかつたと考えても不思議ではあるまい。蛮社の獄は、大局的にみれば、思想的立場を異にする鳥居が、華山およびその同志を陥れようとした陰謀であつたが、直接の目標は、華山の手になる『外国事情書』の

上申をばむところにおかれていた、といえる。いずれにしても、上申されなかつた華山のむなしさとともに、国を思つた危機感と世界状況の綿密な知識力、探求心に強く惹かれるものである。

なお、研究会の底本は、江川文庫所蔵の華山自筆『外国事情書』であるが、その他の翻刻本として、鹿児島県史料『島津斉彬公史料』第一巻（昭和五十五年）・一五二「外国事情書・渡辺華山・



天保十五年」がある。研究会では、底本（写真）とこの鹿児島県史料本を校合して研究を試みたので、その大きな特徴を記述することにする。

鹿児島県史料本には、定本十二丁表の「其為又所八此方一向宗ノ如ク仕候」の後に割書きで短い文章がある（省略）。この文章は日本思想大系五十五、佐藤昌介校注の『外国事情書』には見られないが、底本（写真）には貼紙の跡がみられることから、鹿児島県史料本が本来の形と考えられる。また底本は鹿児島県史料本に比べて、振り仮名、説明仮名が非常に多い（非常に多くつけられた紙面と少ない紙面が極端である）。その他の異同はあるものの、鹿児島県史料本は非常に正確に書写されているものと考えられる。

振り仮名、説明仮名については、鹿児島県史料本は、初めは正確に書写し、次第に取捨選択したとも考えられるが、華山自筆の『外国事情書』には当初から現存のような振り仮名、説明仮名がつけられていたかについても疑問が残る。今後の新資料の発見を待ちたい。

今回は、日本思想大系五十五、佐藤昌介校注の『外国事情書』に見られる「ひらがな」の振り仮名は、底本（写真）には見られないので割愛した。また、はわずかしか書かれていないので省略した。

外国事情書

一、外国之事情ヲ搜索仕候処、外国ノ義ハ一地球 セカイ 中ニ相拘リ候事ニ付、一地球 セカイ 諸國変革ヨリ荒々奉申上候。古ハ一地球 セカイヲ四分仕、亜細亞・歐羅巴・亞弗利加・亞墨利加ト定候処、又亞墨利加ヲ南北二分チ、五大州ト仕、其後見出之諸地多ク相成、四方無残審明仕候ニ付、近來南北亞墨利加ヲ一州ト仕、大平海諸島ヲ取集メ、是ヲ烏烏斯答刺利ト称シ、五大州ト致候。

一 外国の事情を取り調べましたところ、外国のことは、全世界と關係があることなので、世界全体について、諸國変革のことから、概略を申し上げることにします。昔は世界を四つに区分し、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカと定めましたが、またアメリカを南北に分けて、五大州とよぶようになりました。その後多くの島々が発見され、四方すみずみまでつまびらかになったので、ちかごろは南北アメリカをふたたび一州とし、あらたに太平洋上の島々をまとめて、これをオーストラリア（オセアニア州）と称し、これをあわせて五大州とよんでいます。

右五大州ノ内、亜細亞・歐羅巴ハ山ト湖ヲ隔テタルノミニテ候得者、一州ト定メ候テモ可然地勢ニ御坐候。此二州ハ人民諸州ニ相勝レ候得共、亞細亞四十度以南ノ地ハ、又々相勝レ候テ、最古ヨリ教化 ヲシエ 開ケ、文物ミヤビタルモノ 盛ニ御坐候。右ハ 皇國・唐土・天竺・百爾西亞・亞刺皮亞・如德亞等ノ國々ニ御坐候。四十度以北ノ地ハ、肉ヲ食ヒ、皮ヲ着シ、此方蝦夷ノ如ク、唐山ニテ北狄ト鄙シメ候通ニ御坐候。右ハ唯今ノ獨立韃旦・蒙古・滿州 古ハ北高海以東、滿州迄ヲ韃旦ト称シ候得共、其間数十部落有之候処、右三部ハ後來頭名罷成候ニ付、今時ノ勢ヲ以テ認候テ、惣称ハ認不申候 等、及歐羅巴諸國ニ御坐候。

右の五大州のうち、アジア、ヨーロッパの二州は、山と湖を堺としているのみであつて、あわせて一州としても、地勢的にはおかしくありません。この二州は住民が他の諸州に比べて優秀であり、なかでもアジア州の北緯四十度以南の地はまたいぢだんとすぐれています。ここでは最古の時代から人倫の道がひらけ、文化が栄えました。この地域の国々は、日本・唐土・インド・ペルシヤ・アラビア・それにユダヤであります。これに対して、四十度以北の地は、肉を食へ、皮をまとい、いつてみればわが国の蝦夷人のようであり、唐土の人が北狄とよんで軽蔑したのも、もつともなことです。この地域の住民は、ただいまの獨立韃旦・蒙古・滿州（昔はカスピ海以東、滿州までを韃旦と称しましたが、その中には、部族が数十も含まれております。しかし以上の三部族が後年有名になつたので、ここでは現勢にしたがつて、三部族の名をあげ、総称はしたためません）等にヨーロッパ諸國であります。

抑高北海以東 ヨリヒガシ ノ人種ハ 洋人共、コレヲ「モンゴル」種トモ「ダルダリ」種トモ称シ、 皇國・唐土迄其種ニ入申候 黒髮黒眼ニテ勇力有之、車馬ヲ以テ水草ヲ逐ヒ、移住 ウツリスム 仕、高北海以西 ヨリニシノ人種ハ 洋人コレヲ「エチオピア」種ト称シ、 歐羅巴諸國ハ此種ニ入り申候 紅毛碧眼ニテ機知 ワルチエ 有之、舟楫ヲ操リ、魚介 ウオカニノルイ ヲ獵シ、生活 イキテイル 仕候。

がんらい北高海（カスピ海）以東の人種は 西洋人の説では、これをモンゴル種とも、タタール種とも称し、日本人も唐土人もこの種に分類されています。黒髮・黒眼で、勇力にすぐれ、車馬をもつて水草を追つ、という遊牧生活を営んでいました。これにたいしてカスピ海以西の人種は 西洋人の説では、これをコーカサス種と名づけ、ヨーロッパ諸國の人種はこの種にはいるとされています。紅毛・碧眼で、機知に富み、舟を操り、魚介類を獵して生活を営んでいました。

皆深雪重氷ノ地故、飢寒ヲ忍ビ、身命ヲ輕シ候処ハ、同様ニ御坐候。右故、古代南方八尊ク、北方八卑ク候処、後來南方ノ教化、ヲシエ、次第ニ北方ニ広リ、唐土ノ教ハ滿州・蒙古等諸国ニ入リ、即チ元ノ如ク、清ノ如クニ御坐候。如徳亜ノ教ハ歐邏巴ニ入リ、即チ邪宗、キリシタン、ニ御坐候。亜刺皮亜・印度ノ教ハ韃旦ニ入、即チ回々宗、マホメット教、喇嘛宗、仏道ノ一派、ニ御坐候由、依之、懍懍、ムカフミス、詭黠、ヤマギ、ノ俗ハ強勇深智ノ国ト相變ジ、高明、タカイガクモン、文華、ミヤビ、ノ地ハ疎大、シマリナキ、浮弱、ウワキナヨウムシ、ノ風ト相成候故カ、

いづれも雪が深く、氷におおわれた寒冷の地であるため、飢寒をしのび、身命を軽んじる点では、同様であったといえます。ですから、古代にあつては南方は文化の程度が高く、北方は低かつたわけです。のちになると、南方の文化がしだいに北方に伝わるようになり、唐土の教えが滿州・蒙古等の諸国に伝わり、その影響で元がおこり、清がおこりました。ユダヤの教えはヨーロッパに入り、やがてキリスト教が生まれました。アラビヤ、インドの教えは韃旦地方に入り、そこでファイイ宗(マホメット教)・ラマ教(仏道の一派)となつたということです。このようにしてむこう見ずで、あやしげな習俗が変化し、強勇で知力の優れた国民性をもつようになり、南方の高尚な文化の発達した地域は、逆に粗大で浮弱な風俗に変じたせいでしょうか。

東部 ヒガシノカタ ノ蒙古・滿州ハ唐土ヲ併セ、西部ノ韃八亜刺皮亜・那多利亞・如徳亜・歐邏巴ノ厄勒祭亜 古全盛ノ地 ・亜弗利加ノ厄日多 古教化ノ地 ヲ併セ、是ヲ杜爾格國ト申候。蒙古ノ一部、南韃、サマルカント「元史ニ撒馬兒罕ニ作り申候」ニ移リ候者ハ、五印度ヲ併セ、是ヲ大莫臥兒ト称シ申候。「モンゴル」ハ、即蒙古ノ由ニ御坐候。唯今ハ此「大モンゴル」モ英吉利亞・仏郎察・松郎機ニ抛ラレ候而、北ノ方山附ニ移住仕候由、又歐邏巴諸国ハ海外至ラザル隈、スミ、モ無之、四大州諸国ヲ押領候得バ、天地ノ間、韃旦諸部ノ国ニ無之ハ、大抵歐邏巴洋夷、セイヨウノエビス、之腥穢

クサレタナマグサイニライ ヲ披ラザルモノ無之、

東部の蒙古・滿州が唐土を併合し、西部の韃旦はアラビヤ、ナタリア(イエス降誕の地パレスチナ)、ユダヤ、さらに古代に栄えたヨーロッパのギリシア、古代文明の発祥地であるエジプトを併合しました。これがトルコという国であります。蒙古の一部で西トルキスタンのサマルカンド「元史」には「撒馬兒罕」とあります「地方に移動した者は、インド全域を征服し、その国を大モンゴルと称しました。モンゴルとはすなわち、蒙古のことです。ただいまではこの大モンゴルも、イギリス、フランス、ポルトガルに占拠されて、北方の山麓に移つたときいております。またヨーロッパ諸国は、海外の至るところに進出して、四大州の諸国の領土を侵略するので、世界中で、韃旦諸部族の国でなければ、たいていヨーロッパ人の征服地となつていってよいほどであります。

唯 皇國ノ三万邦顛覆ノ中ニ独立仕、最古ヨリ一毫ノ汚瀆ヲ受ザルモノ、一地球中、嬾耦、ナラフ、可仕者更無之、誠ニ難、有義ト奉存候。右之通、天下古今之變ニテ、古ノ夷狄ハ古ノ夷狄、今ノ夷狄ハ今ノ夷狄ニテ、古ノ夷狄ヲ以テ、今ノ夷狄ハ難制奉存候。

ただわが国のみが独立を保ち、古来いまだ外国の支配をつけたことがありません。まことに世界中でたぐいのない国というべきで、まことに有り難きことであります。とはいえ、世界の歴史は大変化をとげ、古代の夷狄は古代の夷狄、近代の夷狄は近代の夷狄であつて、おなじく夷狄であつても、両者はまったく異なるものであります。ですから、昔の夷狄の觀念にとらわれていては、今日の夷狄を制御することは困難であるということであり

つづく

田原市博物館 所蔵品から

重要文化財 文洪筆言偃像

(孔門十哲像の内) 菊池五山賛

文化十三年(一八一六)

絹本着色

縦一〇二・九cm 横三六・九cm

賛の意味は次のとおりです。

一羽の鶏(にわとり)を料理するの
に牛刀の必要はない。優れた才能
の持ち主が、小さな邑を治めるのは
十分である。孔子は心に深く子游の

才能を惜しまれたのであって、冗談
に言われたのではない。千年も後に
生まれた私もまた孔子の言に一言を
加えることもできない。

子游は姓を言、名を偃、字を子游
といいます。孔門十哲の一人です。

呉または衛の国の人で孔子より四十
五歳若くなります。魯の武城の宰

(長官)を勤め、音楽によつて人々
を教化して、孔子を喜ばせました

(論語・陽貨編)。また容貌が醜かつ
たので、はじめ孔子は信頼しなかつ

たが、その人柄を知つてからは、
「言葉だけで人を見て、子羽(澹台

滅明の字)の場合に失敗した」と言
つたという(史記・仲尼弟子列伝)。

澹台滅明(たんだいめつめい)とい
う人物は、この時の部下でした。

画を描いたのは文洪。谷文晁の門
人として文晁の弟子が記した『野村

文紹手録』に掲載されていますが、
どういふ人物かははっきりと特定で

きません。

賛は菊池五山。漢詩人、漢学者で、
父は高松藩(松平氏十二万石)の儒

者菊池室山。五山の号は、尊敬する
白香山・李義山・王半山・曾茶山・

元遺山といふ五人の中国詩人の名か
らきています。江戸で活躍し、『五

山堂詩話』を書き人気を博しますが、
「書画番付騒動」の黒幕と目されて、
人気を失つてしまいます。八十二歳

で江戸で亡くなりました。小説家菊
池寛は、菊池室山のあとを継いだ五
山の兄守拙の末裔になります。

この作品は、昭和三十年二月二日
に重要文化財に指定された渡辺華山
関係資料の附として、同三十二年一
月九日に追加指定され、昭和五十三
年三月二十四日に歴史資料に指定替
されました。

華山会報第五号で「孔子像」を紹
介してから、十哲像を順次紹介して
きましたが、今回にて終了します。
ありがとうございました。

田原市博物館学芸員

磯部奈三子

一鶏之宰牛刀安施

一鶏之宰牛刀安を施さん

大才小邑不足有為

大才小邑、為すあるに足らず

聖心深惜豈唯戲之

聖心深く惜む豈唯之に戯るのみ

千歳之下我亦不能贊一辭 千歳の下我亦一辭を賛する能はず

後学池相孫薰沐拝題

丙子夏月寫

文洪



渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞(9)

三十六、

(狂歌)

宵からの夫婦喧嘩に

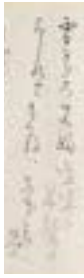
黒髪の

ミたれて今朝八ものをこそ思へ

(狂歌の意)

昨日の宵からの夫婦喧嘩のために、せつかくの黒髪が乱れて、(その黒髪の乱れるように)私の心もあれこれと物思いに悩むことです。

(鑑賞)



髪は、古今東西変わることはない女のいのちである。髪ゆえに起こる悲劇や喜劇は枚挙にいとまなく、人のこ

の世にある限り髪へのこだわりの消えることはないことである。特に、最近では女だけではなく、男もずいぶんと身だしなみを気にするようになって、髪に対するこだわりを示す者も増えて、男も女も赤毛あり、青毛あり、金髪、銀髪、茶髪とまさに百花繚乱、形も、刈り込みあり、巻き毛あり、長髪あり、尖ったものあり、鳥

(本歌)

待賢門院堀川

長からむ心もしらず黒髪の

みたれて今朝は物をこそ思へ

百人一首・八

(歌意)

未永く変わらないであろう(はずのあなた)心をはかることができずに、(お逢いして別れた)今朝、(私の心は)黒髪の乱れるように(千々に乱れて)あれこれと物思いに悩むことです。

の巢のようなパーマありで、次第に髪が人間の自然の姿から離れて、新種の動物の髪にでも変化することを志向しているようにさえ見える。「化粧」という言葉は文字通りよそおい化けることだったのだということ強く印象づけられる昨今である。

本歌の髪も、狂歌の髪も、髪そのものはそうした作られた髪ではなく、いずれも本来の黒髪である。本歌の黒髪は、大垂髪(おおすべらかし)といい、女性が立てば長く垂れて背丈になお余って衣の裾に残っている程の長い黒髪である。先はきちんと切りそろえられており、長ければ長いほど美人としての条件に叶うとされていた。『百人一首』などに描かれた女性の背後に黒々と描かれているので、よく知られているものである。

本歌は、その黒髪のみだれをこころのみだれの比喩として、黒髪がみだれるように後朝(きぬぎぬ)の、女こころの複雑にみだれるさまを詠んだもので、今朝からは頼りとすべき男はこの男と心に決めながらも、男の気持ちを測りかねて不安になっている女性心理がみごとに詠まれている。

これに対して、狂歌の方の黒髪は、もちろん平安時代のような長い髪ではない。江戸時代になると、女性の髪型は、一般の人は大島田とか高島田とか小枝島田とか丸髷とかいわれるものであることは、華山の『校書図』の女性の髪型を見てもわかる。ちなみに『校書図』の女性の髪型は高島田のようである。

この狂歌の黒髪は、それらの髪型のいずれかではあるが、おそらくそんなにきちんとして結んだ黒髪ではあるまい。もっと庶民の日常が彷彿とさせられるような乱れた髷姿を想像した方がよさそうである。そんな姿の女将さんが、宵のうちから夫と激しく夫婦げんかをしている姿は常に狂歌にぴったりの世界である。「こ」では、「黒髪のミたれて」というのは、恐らく、とつくみあいの喧嘩のためにせつかく苦労して結んだ黒髪がこわれてしまつのであって、実に直接的描写である。

従って、同じように「黒髪のみだれて」と詠っても、本歌と狂歌の間の「黒髪のみだれ」には、天と地ほどの違いがある。そして、その違いが、本歌の場合は「けさ」の「物思い」を妖艶な美しささえ感じさせるものとし、狂歌の場合は逆に、「けさ」の「物思い」を「もうこれっきりこの人なんかとは別れてしまおうかしらん」

などと思ひ悩む喧嘩の後の女性の惨めな物思いなどを想像させ、それがかえって、狂歌的な笑いやペースを生むのである。

「黒髪のみたれて今朝は物をこそ思へ」から夫婦喧嘩の場面を想像するところに華山の狂歌的着想のよさがある。

三十七、 行燈も

(狂歌)

行燈もなき貧乏のあはれ家八
もれ出る月のかけのさや

けさ

(本歌)

左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲のたえ間より
もれいづる月のかけのさやけさ

百人一首・七九

(狂歌の意)

行燈もない貧乏のあはれ家は射しこぼれてくる月の光りの何と清らかであることよ。

(歌意)

秋風によってたなびいている雲の切れ間から射しこぼれてくる月の光りの何と清らかであることよ。

(鑑賞)



本歌は、秋の夜の雲の切れ間から漏れる月の光のさわやかさを詠んだものである。すがすがしい秋の月夜の空気を想像させるような叙景歌である。狂歌は、その下の句「もれいづる月のかけのさやけさ」を本歌取りしたもので、同じくすがすがしい秋の月夜のさわやかさを詠んだものであるが、月の光の射すところを「行燈もなき貧乏のあはれ家」とちょっとばかり変えることによって、庶民の笑いとペースを誘う狂歌に仕立てることに成功している。

華山は田原藩といつ一小藩の家老職にある立派な武士であるが、狂歌の世界ではい

つも、貧しい者、お金や生活に苦しむ者など広く庶民の味方であり、よき理解者である。一方では、格調高く、厳しい姿勢で藩政に取り組む為政者としての目を以て世の中を見据えるとともに、他方では、こうした飾るところなくありのままの庶民的な目を以て、あたたかく優しく人間生活のありのままを捉えることを忘れない心の広さを備えている。こうした華山のありさまは、今後とも大いに注目されてもいいのではないか。

三十八、 かけ乞に

(狂歌)

かけ乞に門たゝかれて年の暮
いくよねさめぬすまの関守

(本歌)

源 兼昌

淡路島がよふ千鳥のなく声に
幾夜ねさめぬ須磨の関守

百人一首・七八

(狂歌の意)

借金取りに門を叩かれて、年の暮に須磨の関守は幾夜寝られずに目をさましたことだろうか。

(歌意)

淡路島へ向かって飛び通う千鳥の鳴く声によって磨の関守は行くよ寝られずに目をさましたことだろうか。

(鑑賞)



本歌の主題は、歌枕としても有名な須磨の関で千鳥を聴く感慨を詠ったもので、『源氏物語』の「須磨」の巻などが想起される歌である。

狂歌はその本歌の下の句「幾夜ねさめぬ須磨の関守」を本歌取りしたものである。同じ「須磨」の巻が想起されるにしても、この狂歌の場合、借金取りに悩まされる大晦日の須磨の関守を想起するのであるから、何とも変わって面白。そもそも

も、常にはいかめしい貌で須磨の関を守っている関守が、実は大晦日の日には借金取りに門を叩かれて弱り切っているなど、「うがち」を効かせて、笑いを引き出すなどは、なかなか思いつきにくいことだからである。

三十九、 ゆふのふを

(狂歌)

ゆふのふをしたる娘の間男に
われてもすへに逢んとそ思ふ

(本歌)

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるる滝川の
われても末にあはんとそ思ふ

百人一首・七七

(狂歌の意)

結納を交わした娘が間男をしたが、別れてもまた末にはあの娘と逢おうと思ふ。

(歌意)

瀬が早いので、岩にせきとめられる急流が二つに分かれてもまた再び合つよつに、(私たちも、今は仲が裂かれても)行く末、きつとまた逢おうと思ふ。

(鑑賞)



本歌は、恋する二人の途な情熱を激流に喩えて詠った恋の歌である。「われても末にあはんとそ思ふ」には、その途な気迫、愛の激しさがよく感得される。

狂歌は、同じ恋の歌でも、ぐつと変わって、情けない男の嘆きと、諦めきれない男の情念が込められた歌になっている。特に、結納を交わした娘が間男をして、別れていってしまうというのであるから場面設定は複雑であるが、飛んでる娘と、その娘を自分のところにつなぎ止められないでいるみじめな男との対比が、何とも笑えないおかしさとペーソスを感じさせるのである。

四十、 ころぼつ(を)

(狂歌)

ころぼつ(を)とりそこないしし
やれるらん
雲井にまかふ沖津しらな

(本歌)

法性寺入道前関白太政大臣

わたの原こぎいでてみれば久方の
雲ぬにまがふ沖つ白波

百人一首・七六

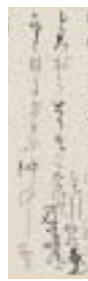
(狂歌の意)

泥棒を捕らえ損なって粹に気取っているようだ。天の雲と間違えそうな所まで離れてしまった沖の白波(泥棒)であることよ。

(歌意)

はるか大海原に、舟をこぎ出して(あたりを)見たすと、(一面に)天の雲と間違えそうな沖の白波であることよ。

(鑑賞)



本歌は、「海上遠望」という題で詠まれた題詠歌である。大海原のあなたに、波とも雲とも分からぬほどに見える沖の波の様子があおらかに詠まれている。

狂歌は、その本歌の下の句「雲ぬにまがふ沖つ白波」を本歌取りしたものである。この本歌から泥棒が連想されたのは、「白波」という表現からで、歌舞伎では『白波五人男』などよく上演されたが、この「白波」は泥棒のことだからである。また、「しゃれる」というのは、粹に気取るの意味であろうか、泥棒を取り逃がしてしまつたにもかかわらず、後になって強がり得意になっている様子なのである。「雲ぬにまがふ沖つ白波」というのは、はるかかなたに逃げていってしまった泥棒よということ、泥棒を前にしては、意気地の無かつた者が、後になって妙に粹がっているようすが、何とも滑稽で笑いを呼ぶのである。

研究会員 山田哲夫

華山の田原行（一）

田原蟄居を含め、華山は、生涯五回田原に来て
います。天保四年（一八三三）の四回目の田原来
訪の様子を、華山は、次の日記に詳しく書き記し
ています。

- ・『全樂堂日録』 二月一日～二十一日
- ・『客参録』 二月二十三日～四月十四日
- ・『参海雜誌』 四月十五日～二十五日

華山は、この旅の目的を、「御系譜の御用、巢
鴨老候の三河志の御用をかねて」と『参海雜誌』
に記しています。しかし、天保三年（一八三二）
海防掛となった華山にとっては、この「かねて」
という言葉のなかに、「田原藩の海防の現状を知
らなければ海防はできない、このさい田原藩の海
岸防備の視察をしよう」という意図があったと考
えることはできないでしょうか。後に書かれた
『再稿西洋事情書』の「西洋諸番之事情を搜索仕
候義は、実に今時の急務と奉存候」や、『慎機論』
の「兵備は敵情を審にせざれば、策謀の繇て生ず
る所なき」という理由から外国事情の研究を始め
たという記述を見れば、田原の実情をあまり目に
したことがないだけに、国元の様子を知りたかつ

たのではないのでしょうか。

今回から、前記三冊の日記に書かれている華山
の田原来訪について紹介していきます。

◎『全樂堂日録』

文政十三年（一八三〇）、華山三十八歳からの
ことが書かれた日記です。後半部分に、「己下征
参録」とあり、天保四年一月十八日からのことが
書かれています。この日から二十八日まで江戸出
立から東海道を下る様子が述べられているので、
本編に入る前にこのことを紹介します。東海道の
宿駅等については、「東海道超巨大スクロールマ
ップ集」(<http://www3.cnet-ta.ne.jp/okamoto/s-map.htm>)に分かりやすく掲載されており参考に
なりました。



渡辺華山筆 客参録

一月十八日

学問の師・佐藤一斎のもとを訪れ、旅立ちのあ
いさつをしたことを皮切りに、二十一日までに、
知人のもとを訪れ、別れのあいさつをします。時
には杯を交わし、旅の心得を聞く等、別れを惜し
む様子が書かれています。この時代の旅行が、今
以上に大事であったことが分かります。なお、二
十一日の条には、友信から餞別を賜ったことも書
かれています。

二月二十三日

「お江戸日本橋七つ立ち」と歌われるように、
この時代の出
立が早立ちで
あることは、
よく知られて
います。午前
二時に予約し
た迎えの馬が
来ないので、
華山は、出立
を家廟と母に
告げ、午前六
時、出立しま
す。驚くべき



保永堂版東海道五十三次 日本橋

ことに、前日帰宅したの、午前〇時です。

川崎宿まで藩土の見送りをつけ、宴を催し、別れます。この間、海苔の製法に詳しい大森の浜川（品川区南大井）の森田屋勇次郎を訪れ、海苔の製造方法を教えてもらいます。このことは、一月十九日の条に、「堀の内作太夫来、海苔製法の事をたのミしに、大森浜川の森田某に頼遣す」と、予定であったことが書かれています。

この日は、戸塚宿の麹屋に泊まります。



保永堂版東海道五十三次 戸塚



保永堂版東海道五十三次 川崎

一月二十三日

天保三年五月、華山は、年寄役に就きますが、最初に取り組んだ仕事は、紀州難破船貨物横領事件です。紀州藩の難破船が国元の赤羽根に漂着した時に、地元の人とその積荷を盗ってしまいました。賠償を求める紀州藩に対し、華山は、幕閣をはじめ東奔西走し、少しの弁済金でこの事件を解決します。この旅の時は、まだこの問題が解決しておらず、一月二十日の条に、「これ迄難船の事に骨をくだき心を苦しめ、ひたぶるに百姓の苦難を救んと思ひしに、事半にして御召にしたがふ事、心ならざれども思ひす」と書かれています。

今回の田原来訪は、この事件も関係しているのではないかと思われま。それは、この日、気分が悪いのに、鎌倉の浄智寺まで行き、事件解決の頼みことをするために、同寺で一泊するからです。

浄智寺とは、北条氏が創建し、夢窓国師もいた寺で、東慶寺の南東、円覚寺の南に位置しています。

華山来訪を聞いた円覚寺の住職が浄智寺に来て、華山に絵を求め、歓談します。

なお、鎌倉に至る道順が、「天王橋という川にそひて南に入る。倉田、長沼等いえる所を過ぐ。」「巨福路谷村」「円覚寺の北門に達す。」と書かれていることから考えると、華山は、戸塚宿から鎌倉道を通り、巨福路坂の切通しを通り、鎌倉に入ったと考えられます。

鎌倉道とは、鎌倉街道とは別で、江戸時代は浦賀道と呼ばれ「浦賀道見取絵図」に描かれた道ということだが、「東海道分間延絵図を歩く」(<http://kentaza.hp.infoseek.co.jp/KAMAKURA/KAMAKURA.HTM>)にありました。同ページは、製作者が実際に歩いた道順や景観が紹介されており、現在の街道の様子をすることが出来ます。同ページに、「相模国風土記稿」として、以下のことが紹介されていました。（数字は漢字に変換）

- 上倉田村 江戸より行程十里八町余 民戸四十七
- 下倉田村 江戸より行程十一里 戸数四十八
- 長沼村 江戸より行程十里十七町 民戸三十三
- 小袋谷村 江戸より行程十二里余（略）民戸二十五外長吏三戸

研究会員 柴田雅芳
(続)

華山史跡
田原城跡

田原城は、戦国時代初期の文明十二年（一四八〇）頃に、戸田弾正左衛門尉宗光によって築城されました。戸田氏は五代六十八年間、田原城を拠点とします。築城当時、東側から北周りに西側にかけて海に面し、巴型に水堀を張り巡らせて主郭を守った。戸田氏は三河湾全域の支配を考え、街道沿いの豊橋（当時は二連木城）ではなく海に面した田原城を本拠としたと考えられる。

その後、田原城は、戦乱の中、駿河の今川氏の城代が四代十九年間、松平元康（家康）の家臣本多氏が二代二十六年間、在城しましたが、豊臣秀吉による家康の関東移封により、本多氏も関東に移ったため、吉田城主池田輝政の家臣伊木清兵衛が田原城代となりました。現存する田原城の遺構のほとんどは天正の終わ

りから文禄にかけて、伊木清兵衛によって、整備されたものと考えられます。

関が原の戦い後、伊豆下田より戸田土佐守尊次が禄高一万石で移封され、三代治めますが、寛文四年（一六六四）以来十二代二百六年間は三宅氏が城主となりました。

廃藩置県後の明治五年（一八七二）、田原城の建物一切が、解体撤去され、田原城はその歴史を閉じました。



本丸には巴江神社が建てられており、北西の土塁は残存し、本丸と二の丸の間には、人工的に土をかき上げた空堀及び土塁に中世城郭の名残が見られます。三の丸は護国神社、各種の記念碑が建立されており、虎口は既に破壊されています。空堀は良好に残存し、西端に一部大規模な土塁と空堀が残存しています。腰曲輪は公共機関や私有宅地となっています。桜門は廃城前の写真を基にして平成5年に復元され、その時、石垣は積み直しを行いました。水堀は桜門南側から見えて、右が袖池で、旧状を残しています。平成5年には二の丸跡に田原市博物館が建設され、城跡の整備を行いました。また、惣門跡には石垣が見られ、隣接して、防災倉庫「田原市報民倉」が建設されました。

渡辺華山が天保四年（一八三三）に田原を訪れた際に、田原城周辺をスケッチし、『客参録』として残しています。

田原市博物館学芸員 鈴木利昌



田原城桜門



会所在北郭内



新倉会所之庭

城主一覽表

戦国戸田氏

代	氏名	城主在任期
初代	戸田弾正左衛門尉宗光 ^{むねみつ}	1480 ~ 1499
二代	戸田弾正忠憲光 ^{のりみつ}	1499 ~ 1509
三代	戸田左近尉政光 ^{まさみつ}	1509 ~ 1526
四代	戸田弾正少弼宗光 ^{むねみつ}	1526 ~ 1542
五代	戸田孫四郎堯光 ^{たかみつ}	1542 ~ 1547

	天野安芸守景貫 ^{かげつら}	1547頃
	朝比奈肥後守元智 ^{もとさと}	1548頃
	岡部石見守輝忠 ^{てるただ}	1561頃
	朝比奈肥後守元智	1562 ~ 1565
	本多豊後守広孝 ^{ひろたか}	1565 ~ 1577
	本多彦次郎康重 ^{やすしげ}	1577 ~ 1590
	伊木清兵衛忠次 ^{ただつく}	1590 ~ 1601

戸田家

初代	戸田土佐守尊次 ^{たかつく}	1601 ~ 1615
二代	戸田因幡守忠能 ^{ただよし}	1615 ~ 1647
三代	戸田伊賀守忠治 ^{ただはる}	1647 ~ 1664

三宅家

代	氏名	城主在任期
初代	三宅土佐守康勝 ^{やすかつ}	1664 ~ 1687
二代	三宅備前守康雄 ^{やすを}	1687 ~ 1726
三代	三宅備後守康徳 ^{やすのり}	1726 ~ 1745
四代	三宅備前守康高 ^{やすたか}	1745 ~ 1755
五代	三宅備後守康之 ^{やすゆき}	1755 ~ 1780
六代	三宅備前守康武 ^{やすたけ}	1780 ~ 1785
七代	三宅能登守康邦 ^{やすくに}	1785 ~ 1792
八代	三宅備前守康友 ^{やすとも}	1792 ~ 1809
九代	三宅对馬守康和 ^{やすかず}	1809 ~ 1823
十代	三宅備前守康明 ^{やすてる}	1823 ~ 1827
十一代	三宅土佐守康直 ^{やすなお}	1827 ~ 1850
十二代	三宅備後守康保 ^{やすもち}	1850 ~ 1869

『田原城跡案内板』より



財団法人華山会
田原市博物館 から
ご案内

企画展のご案内

九月十五日～十月二十二日

秋の企画展「福田半香展」(企画展示室)

同時開催 渡辺華山と弟子たち

三月二十三日～五月十日

春の企画展「岡田虎二郎と中原悌二郎展」悌二郎をめぐる作家たち」

同時開催 渡辺華山と椿椿山

平常展のご案内

十月二十七日～十二月十日

渡辺華山「水墨の妙」(特別展示室)

田原の歴史「田原藩」(企画展示室1)

渥美半島を描く

Part

十二月十四日～二月四日

渡辺華山の家族「渡辺如山没後百七十年」

(特別展示室)



田原の歴史「市指定文化財を中心に」

(企画展示室1)

田原の歴史「川地遺跡」(企画展示室2)

二月八日～三月十八日

渡辺華山・椿椿山の描く肖像画

(特別展示室)

陶磁器 幽幻の美を求めて

(企画展示室1)

ひな人形展

(企画展示室2)

常設展示室では渡辺華山の生涯を紹介しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展

一般 秋 六〇〇円(四八〇円)

春 七〇〇円(五六〇円)

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

毎週月曜日は休館、月曜日が祝日の場合は翌日

渥美郷土資料館からのご案内

十月二十一日～十一月二十六日

特別展「渥美半島を描く」

企画展示室ほか

記念講演会

演題「渥美半島・海のシルクロード」

講師：道家珍彦(白土会委員)

日時：11月12日(日)午前10時30分

会場：渥美文化会館大会議室

ギャラリートーク

講師：道家珍彦(白土会委員)

日時：10月21日(土)午後1時30分

会場：渥美郷土資料館

展示解説

日時：11月3日(祝)午後1時30分

*田原市博物館担当学芸員による展示説明です。

二月十日～三月四日

企画展「ひな祭り展」

入館無料

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第十七号

平成二八年十月二一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

〒四四一-1142

愛知県田原市田原町巴江二二の二

TEL 五三二・二二一・二七

FAX 五三二・二二一・二七一

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

吉川利明 林 和彦

山田哲夫 別所興一

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成一九年四月二一日